

~~~~~編集後記~~~~~

本号は「歴史のなかの女性」特集号ということである。フェミニストたちが歴史の英語にあたる語が“hi (s) tory”であるのは差別語だと主張したのは昔のお話。「歴史をさわがせた女たち」にもっと関心が寄せられてもよいのではというのが特集号の編集をしての感想である。(K. B.)

第11号をぶじに送り出せることになって安堵しています。当たり前なのでしょうけど……こういう立場にいなければ気にもとめずに通り過ぎているであろうことに神経を集中させるという経験を通して、「当たり前」の現象の重みを感じました。原稿をお寄せくださった先生方、「手仕事」に徹してくださいました編集委員の先生方、そしてあらゆる面に細かく気を配ってくださった豊福さんに感謝しております。(A. F.)

編集委員会に加えていただいて、掲載される前の原稿を読む機会を与えられ、同じものを見ながら、違う視点でとらえるとこうなるのかと目を開かれたり、これまで、今、これから、女性として、人間として、どう生きてきたのか、どう生きるべきなのか、考えさせられたりと、多くを学ばせていただきました。(Y. M.)

編集委員会なるものに属したのは、なんと高校時代以来のことです。夕暮れの教室であれこれ議論しあった友人の顔を、ふと思い出しました。いただいたはやはやの論文原稿を読みながら、思考が一つの論文になるのにも、論文が一冊の論集になるのにも、モノづくりに欠かせない手仕事の過程があるのだということを、実感しています。(M. M.)

わたしがこれを書くのもこれで最後のようです。いま振り返ってみて、任期中あまりこれといった仕事をした記憶もなく、ただかたちだけ会議の末席に連なっていたというのが実感です。ただ編集委員にさしたる仕事がなかったということは、誰それの論文を掲載するのは問題ではないかななどということがあまり真剣に論議されてこなかったということで、裏からいえば、投稿論文の質がそれだけ高かったということでもあり、いいことだったのだと思う。女性史関係のものだけでなしに、(わが国ではまだあまり成果が出ていないのかも知れないが)女性学の方法論に関するもの、現場からの声あるいは毎年おこなっていただいている実践家の講演の簡単な要旨、女性学を否定する見解なども今後ふんだんに掲載し、この雑誌をいろいろな世界観（といえば大げさになるが）のせめぎ合う百家争鳴でリベラルなアリーナにしていたら、ますます面白くなるのでは……。(T. S.)

